

第二章・マラカンド・キャンプ

私はたまたまヴィア・サクラを歩いていたらホラティウス

ノウシエラの町と宿营地はマラカンド野戦軍のすべての作戦運営の基点である。カプールのインド側にあり、ラウル・ペンディから鉄道で六時間かかる。平時、その駐屯地は一個現地騎兵連隊、一個英国歩兵大隊、一個現地歩兵大隊で構成されている。戦争中、これらの部隊は前線で用いられた。兵舎は大きな病院になった。どこもかしこも輸送手段や軍の貯蔵品で混みあっていた／そして基地司令官のシャルチ大佐の指令下に残ったのは貧弱な部隊だけであった。

ノウシエラからマラカンド峠とキャンプまでの道路は、長さ四七マイルで、四つの行程に分けられる。通常は優れたトンガ（*一頭立ての馬車）の便があり、その距離は約六時間で踏破される／しかし野戦軍が非常に多くの交通手段を利用し、非常に多くの将校が路線を上下に移動したのでトンガのポニーはすぐにひどい痛みと憔悴に陥り、それを引いていく行程に九、一〇、あるいは一二時間もかかるようになってしまった。ノウシエラを出てカプールの川を渡る一五マイルの行程で旅行者はマルダンに到着する。「メルダン」と発音される―この場所は、ガイド軍団の常設基地である。夏の数か月は恐ろしく暑い、日陰が多くて心地よい。素晴らしいポロ・グラウンドと快適な休憩所が自慢である。通行者はガイド隊の墓地、おそらく世界で唯一の連隊墓地を見るために立ち止まるべきである。彼らがポロに興じたグラウンドの近く、住んでいた宿舎の近くのヤシの木の下のこの最後の休息場所に、国境線で殺された歴代の国境監視員の遺体が葬られているのである。世界を探しても兵士がこのような勇敢な一団の中に眠っている場所はないであろう。

マルダンの後、道路はよりホコリっぽくなり、周囲の土地は不毛で乾燥している。「これは秋のことである。冬と春には、しばらくの間、土地は緑に空気は冷たくなる。」トンガが進むにつれて山々が近づき、その形と色がよりはっきりしてくる。平原から隆起したいくつかの小丘と尾根が、そのずらりと並ぶ丘の列の前哨地となっている。カプールの支流であるジャララ川の―浅瀬を渡ると、第二行程に到達する。平時には小さな泥の砦がその唯一の目印となっているが、この前の戦争の際にこれは拡張され、周りに塹壕をめぐらせた相当なキャンプとなっていた。そこはすでに放棄された場所なのでポニーの交換のために停止するだけで、すぐに行程は再開される。道の両側の並木がなくなる。道路は山に向かって伸びる単なる白い筋のように見える。それは、うだるような暑さと窒息するようなホコリの中を横切っている。土地全体が赤く、不毛で、焼き尽くされている。前方には巨大な丘の壁が暗く不気味に立ち上がっている。ようやく峠の麓のダルガイに到着する。それもまた泥の砦であり、作戦中に塹壕のあるキャンプへと拡張され、絡み合った有刺鉄線

の網に囲まれている。マラカンド峠が見えるようになり一居並ぶ山々の大きな裂け目である一峡谷のはるか上に、それを守る要塞の輪郭がはっきり見える。

ダルガイから峠の頂上までの傾斜道路は折り返しの多い長い登り坂で終了する。疲れ知らずの御者が背中痛む惨めなポニーを鞭打つ。ようやく頂上が近づく。その眺めは立ち止まって一見する価値がある。背後の下方には、熱気のもやの下に広大な開けた土地がある一滑らかで平らで、かすんだ地平線まで伸びている。トンガが角を曲がると新しい世界に入る。涼しい風が吹いている。平和から戦争への一步を踏み出したのである／文明から野蛮へ／インドから山へ。すべての方面で風景は荒々しく険しい。尾根は尾根に連なっている。谷は谷に通じている。見渡す限りどの方向も険しい峰と支脈である。平原の国は過ぎ去り、私たちはハンプトン・コートの迷路のように絡まっていて、山が生垣の代わりをしている奇妙な土地に入ったのである。その土地はとても凸凹で、とてもゴチャゴチャしている、はっきりとした印象を伝えようとするとは私は絶望してしまうほどである。

マラカンドはその縁が割れて多数の割れ目とギザギザができている巨大なカップのようなものである。このカップの底に「クレーター」キャンプがある。最も深い裂け目がマラカンド峠である。ギザギザの中で最も高い地点はガイド・ヒルで、その上に砦が立っている。そのような場所を守るために、カップの縁を保持する必要があることを理解するのに専門的知識は必要ない。しかしマラカンドは必要な守備隊を収容するにはカップの底が小さすぎる。したがって軍事的な観点から見ると、位置そのものが悪く防衛不可能である。修正および改善された防衛計画では、利用可能な接近経路を見渡せるようにし、見渡せないところは絡み合った有刺鉄線やその他の障害物で封鎖するという取り決めがなされ／そして、賢明な任務の体系によって、縁の大部分が現在保持されている。しかし今でも有能な鑑定者たちはその場所は防衛に向いていない、と私に言う／峠は砦だけで保持できる、そしてそこに駐留している旅団がダルガイに撤退するならより安全で同じように有用であろう、と。この物語が始まったとき、マラカンド南キャンプは軍隊を配置することがありえない場所であった。接近が容易であった。それは近隣の高地に閉じ込められており、見渡されていた。「戦後の取り決めによって、マラカンド陣地とチャクダラとダルガイでの任務は二個大隊と分遣隊によって維持されることになった。これを遊撃隊が支援するのであるが、その正確な位置と構成は未定である。」

コタル（*現地語の峠）のキャンプのエリアは小さかったため、カルの平野に二番目の野営地を作る必要があった。これはカップの北の外縁のすぐ下にあった。これは政治的な理由から北マラカンドと呼ばれた。それは軍事的な位置としても根本的に悪かった。それは至る所から見渡され、峡谷とヌラーに囲まれていたため、敵が入りやすく、部隊が出ることは困難であった。もちろん、それには戦略的価値はなくマラカンドを保持するための、

クレーターと砦に居住場所がない軍隊の住居としてのみ使用されていた。北キャンプは今では明確に放棄されている。

しかし誰もとりわけその場所を選択した人々は―攻撃の可能性を検討したようには思えない。実際、マラカンド・キャンプ全体が純粹に一時的なものと思われていた。英国の政党と政策の変化によって引き起こされた優柔不断によって、マラカンド守備隊は二年間理論的にも現実的にも十分な防衛ができない立場に留まっていた。当初一八九五年のチトラル遠征の後、この前進駐屯地での旅団の保有は、ほんの数週間の問題であると考えられていた。しかし月日が経つにつれて、その不確かさにもかかわらず、キャンプは永続性の外観を帯びてきた。将校たちは小屋を建て、食堂を建てた。カルの近くで良いポロ・グラウンドが見つかった。そして注意深い管理によって急速に改良された。競馬場が計画された。既婚の多くの将校は妻と家族を山間のキャンプに連れてきた。そして場所全体が急速に正式の宿营地になろうとしていた。ガジの怒りの事件が静けさを破ったことはなかった。キャンプを出るすべての人物にはリボルバーの携帯を義務付ける規定があったが、弾を込めていないか、現地人馬丁に持たせていた。丘へ行く狩猟パーティーが組織された。伯仲したポロ・トーナメントがクリスマス・ウィークに開催された。著名な旅行者―国会議員でさえ―はこの帝国の前哨基地を訪れ、アングロ・サクソン人があらゆる状況を自らのスポーツと習慣に適応させてしまうことの迅速さと容易さを興味深く観察した。

同時にマラカンド旅団の駐屯地は快適なものではなかった。彼らは二年間、キャンバス地の下や粗末な小屋に住んでいた。極端な気候にさらされていた。暑い日にもパンカ（*天井からつるして綱で引いて仰ぐインドの布製大うちわ）や氷はなかった。鉄道からは約五〇マイル離れていて、交際や娯楽に関しては完全に自分たちでやりくりしなければならなかった。イギリスの騎兵将校（*自分のこと）は職務上の反対、費用、邪魔にもかかわらず、辺境での就役に成功したとき、辺境軍の将校たちに妬ましい目を向けてしまいがちである。彼らは彼が好意にすがって懇願するようなことを当然のこと、命令によってそうすることとして受け取っているからである。しかし忘れてはならない。これは孤独で人里離れた駐屯地での不快で退屈な長い月日、そして敵の前では名誉であり歓迎されるべきものではあっても平時には不愉快となる苦難を受けていることの代償なのである。

マラカンド峠を通過した後、最初の右への分岐点はスワット溪谷に続いている。旅行者は山の中にいる。視界はすべての方向で岩の壁によって制限または終了される。谷自体は広く、平らで肥沃である。真ん中を流れる速い川が流れている。その両側には、広く細長い田んぼがある。乾燥した土地には他の作物がつけられている。多数の村があり、そのいくつかは大きな人口をかかえている。美しい景色である。山の涼しいそよ風が太陽の熱を和らげている。豊富な雨が大地の緑を守っている。

古代にはこの地域は仏教王国の中心であり、ウーチャンまたは「公園」を意味する「ウディアナ」として知られており、かつての占有者が快適な溪谷を高く評価していたことを示している。「人々は」と五世紀にこの地を訪れた支那の巡礼僧・法顕は言う。「みな中央インドの言葉を話している。『中央インド』とは私たちが『ミドル・キングダム』と呼んでいるものである。庶民の食物や衣服はその中央王国と同じである。仏法はウーチャンで非常に盛んである。」「公園」とは―サババツと呼ばれた―スワット川の兩岸にある土地全体を言うが、おそらく特に森林、花、果物で有名な溪谷の上端を指すのであろう。谷はその美しさの多くを留めている。しかしそれを手に収めた獐猛な征服者の無思慮が森林を破壊し、無知が花と果実を衰退させてしまった。

現在の住民の評判は悪い。その油断のならない性格は不誠実さと残酷さで悪名高い人々の間でも際立っている。パシヤン人の間にはことわざがある：「スワットは天国、スワット族は地獄の悪魔。」何年もの間、彼らは臆病者の汚名を着て辺境部族から軽蔑され、疑いの目で見られてきた／しかし最近の戦闘におけるその振る舞いは、少なくともこの汚名を雪いだであらう。

現在は数人の小族長がスワット渓谷を分割統治しているが、一八七〇年までは一人の統治者が治めていた。スワットのアクンドはインドで最も名誉ある職業とされている牛飼いの生まれであった。牛は神聖な獣である。彼の勤めは神々と人々に喜ばれる。プリンスはその名を誇りとする―ただし彼らは通常それ以上の熱意を持たない。「ギコワール」は直訳すると「牛飼い」である。そうした仕事から未来のアクンドはインスピレーションを得た。彼はインダス川の土手に座って何年も瞑想した。そして聖人になった。川岸の沈思を長く続ける（＊川の照り返しを長く浴びる）ほどにその神聖さは増した。その神聖さの評判はその地方全体に広まった。スワット族は自分たちの谷に来て住むよう彼に懇願した。もつたいをつけて不承不承の態度で駆け引きしてから、彼はインダス川岸からスワット川岸に移ることに同意した。そして人々の尊敬を受けつつ数年間縁の谷に住んでいた。大反乱時にスワット王サイド・アクバルが死去し、聖人は宗教的権力と同様に世俗的権力を継承した。一八六三年に彼はイギリスに対するジハードを説き、アンベイラ戦役でスワット族とブナヴァル族を率いた。サーカーが戦争を終わらせるために示したあまりにも途方もない力に老人は明らかに感銘を受けたようである。その直後から彼は政府に友好的になって多くの敬意の印を受け取った。

彼は一八七〇年に死去する前に人々を周囲に呼び寄せ、いつかその谷がロシア人とイギリス人の間の争いの舞台になるであらう、と言いつつ放った。そうなったときにはイギリスに味方して戦うように、と彼は命じた。発言はその有名な僧侶の記憶に結びついて部族民の

心にしっかりと留められており、英国人には主に「バブ・バラード（*漫画つきナンセンス詩集。W・S・ギルバードのものが有名だがその中に該当作品は見当たらない。エドワード・リアーにThe Akond of Swatというナンセンス詩がある。）」を通じて知られている。

彼の二人の息子は死去しているが、どちらもかなり若い二人の孫「スワットのミヤングル家」は谷に住んでおり、スワットの至る所にあるアクンドの土地保有権を受け継いでいる。彼らには政治的影響力はほとんどない／しかしその人物と財産はミンガオラ近くのサイドウで神聖な香りの中に眠っている祖父のおかげで人々と英国人から重んぜられている。

マラカンドの東八マイルのところにはチャクダラの信号塔が見える。そちらへ向かって広い傾斜道路が平原を横切るリボンのように走っている。それはコタルキャンプから七マイルのところであマンダラ峠を通る。そこにおいて南の山々からの突出部が著しく低くなり、峠道となっているのである。そしてそれはさらに北に向かい、川に架かる要塞橋へと続く。この道は歴史的なものなので、読者には覚えておいていただきたい。それはマラカンド野戦軍の前進経路であるだけでなく、まさしくその存在理由である。この道がなければマラカンド・キャンプも、戦闘も、マラカンド野戦軍も、物語もなかったことであろう。チトラルへの道である。

ここで、たちまち、辺境政策全体の広大な問題が提起される。私たちがマラカンド峠を保有しているのはチトラル道路を開通させておくためである。チトラル道路を開通させておくのはチトラルを保持しているからである。チトラルを保持しているのはそれが「フォワード・ポリシー」だからである。こうして私は主に軍事的事件と小事件の物語に充てようとしたこの書物の正に冒頭において、イギリスの最も鋭い知識人が迷っており、インドの最も価値ある鑑定が分かれている広大な政治的問題に直面することになった。もし私がとても大きく、論争の的になっていてその問題の論議を、後の章でおそらく私が読者のより大きな共感と同意を受けるまで先延ばししたとしても、私を臆病者や弱虫と思ってもらいたくはない。物語が終わった後でその教訓を指摘することは不適切とは言えないであろう。

慎重を期すなら先に延ばした方が良いでしょう。しかしチトラル保持の適否の考察を先延ばししている間にその手段を説明するにはこの章が都合である。もし必要がなかったとしても。

ノウシエラは路線上にある鉄道基地である。そこから私たちはマルダンへ、そして辺境へと渡ってきた。ここで新しく、問題となっている部分が始まる。それは最初に下ラニザ

イ地方を通過し、マラカンド峠を登り谷へ降下してそこから上ラニザイ地域と下スワットを通過してチャクダラに至る。ここではスワット川を要塞に守られる細い吊り橋で渡る。この橋の三つの支間の長さを合わせるとほぼ一五〇〇フィートになる。それは一八九五年の作戦中に約六週間で建設された、非常に注目すべき軍事土木工事の一例である。道路はスワット川を越えてからディリのカーンの領域を北と西へと走り、マラカンドから三五マイル離れた辺鄙なサドウ村（*パンジコラ川とジャンドル川の合流点近く）へと続いている。ここが最初の区間の終わりであり、その先は車輪の通行ができない。道路はラクダ道となつてパンジコラ川の左岸伝いに曲がりくねっている。ディリから五マイル以内に到達したところで吊り橋を右岸へと渡る。そしてディリ川との合流点からその川に沿って行くとディリに到達する。サドウからの距離は約五〇マイルである。ラクダはディリの先へは進むことはできない。ここから三番目の区間が始まる―ラバだけが通行できる道で距離は約六〇マイルである。ディリからの道は土木工学の勝利である。多くの場所では驚くべきジグザグで支脈大な崖の表面に取り付けた木道でつながっており、他の場所では驚くべきジグザグで支脈を迂回したり、山腹を削ったりしている。そして道の終わりにはチトラル砦があり、二個大隊、一個工兵中隊、二個山岳砲兵隊からなる守備隊が駐屯している。

道路はそれが通過する地域の部族民によって維持および保護されている／しかし、それが遮断される可能性のある二つの主要な地点は帝国の守備隊が保持している。マラカンド砦は山の通路を守っている。チャクダラは川を渡る橋を守っている。残りについては部族民が徴用されている。ラニザイ族はインド政府から毎年三〇〇〇〇〇ルピーの助成金を受け取っており、それによってスナイダー銃で武装した二〇〇人の非正規軍を維持している。これをイギリスの将校は失礼にも「Catch, em—alive—Os.」（*一九世紀半ばの蠅取りのスラング、ラドヤード・キップリングが無鉄砲な若い兵士の一団に対して使った）と呼んでいる。彼らが略奪者を追い払い、非道と殺人を思いとどまらせる。その領土を七三マイルもの道路が走っているディリのカーンは政府から六〇、〇〇〇ルピーの助成金を受け取っている。それゆえ彼はその任務に四〇〇〇人の非正規兵を提供している。

大規模蜂起の前にはこれらの協定は見事に機能していた。ルートの維持に関心のある部族民は政府への敵対行為に最も消極的であった。マラカンドの南に住む下ラニザイ族は完全に降りた。部族の長老たちは熱くなりやすい若者の武器をすべて集め、部隊を攻撃することを禁じた。上ラニザイ族は騒乱の現場に近く、迷信と恐怖によってムラーに加勢するよう誘導された／しかしとても中途半端であった。スワット族は狂信に流された。ディリのカーンはイギリスの援助に完全に依存しており、その領民も助成金の利益を理解していたので裏切ることはなかった。

道路が興味深ければその物語はさらに興味深いものであり、その建設につながった出来

事と原因の要約は、国境部族の政治の歴史と方法論にも何らかの光を当てるであろう。

とるに足りない首長たちはその権力が不確実で不安定であるため常に何らかの強力な宗主国の支持を求めてきた。一八七六年、チトラルのメータル（*インド北西辺境の支配者の古い称号）であるアマン・ウル・マルクは庇護を得ること、私たちの臣下であるカシミアのマハラジャの臣下になることを勧められた。事前の全体的な計画に従って、インド政府がすでに承認していたイギリスの機関がギルギットのチトラーカシミア辺境に直ちに設立された。アマン・ウル・マルクは一定の武器と弾薬の供給と六〇〇〇ルピーの助成金を提示され、その後一二、〇〇〇ルピーに引き上げられた。このようにしてイギリス人はチトラルの権益とその国境の監視地点を得た。一八八一年に機関は撤退したが影響力は残り、そして一八八九年にはるかに大きな守備隊とともに再建された。一方、アマン・ウル・マルクは政府の意思を大いに重んじ、助成金と比較的な平和を享受しつつチトラルを統治していた。しかし一八九二年に彼は死去した。みな同様に残忍で野心的で悪辣な多くの息子たちが残された。その一人であるアフザルは、最年長でも、公認の相続人でもなかったが、その現場にいたことが幸いした。彼は権力の手綱を握り、捕えることができた兄弟をすべて殺し、自身がメータルとなることを宣言してインド政府の承認を求めた。彼は「勇氣と決断力の持ち主」と見られ、その支配には安定した統治の見通しがあったため、彼は首長として認められた。生き残った兄弟は隣国に逃れた。

最年長のニザムはギルギットにやって来てイギリスに訴えた。助力は得られなかった。祝福はすでに与えられていた。（*聖書の話…ヤコブが兄エサウからイサクの祝福をだまし取ったことに重ね合わせている）しかし、一八九二年一月、故アマンの兄弟であるシヤー・アフズルがチトラルに秘かに戻ってきた。そしてその地で兄弟愛に駆り立てられ、自らの甥である新メータルともう一人の兄弟を殺した。そして「邪悪な叔父」は王座、あるいはそれに等しいものに入った。しかし反発が起こった。インド政府は彼を承認することを拒否した。ギルギットにいたニザムは自らの主張を力説し、ついにその相続財産を取り戻しに行くことを認められた。二五〇人のカシミア・ライフル隊の精神的援助が多くの支持者をもたらした。彼は人々と結びついていった。縮小規模のオレンジ公ウイリアムの上陸（*名誉革命で王としてオランダからイングランドに上陸）であり、オランダ軍の代わりにカシミア軍がいた。これに対抗するためにシヤー・アフズルが送った一二〇〇人の兵は寝返った。篡奪者である叔父はそれ以上待っていることは危険であることを悟り、ジェームズ二世がフランスに逃げたようにアフガニスタンに逃げ込んだ。そこで支配者に厚遇され、将来の騒乱の要因として注意深く保護された。

ニザムはその願いがかなって今やメータルとなった。しかし、彼は自分の権力を大きく行使することはなかった。地上の野心の虚しさについて陳腐な内省をしていたのかもしれない。

ない。最初から彼は貧弱で不人気であった。しかしインド政府の支援を受けて、どうにかその領土に対する弱々しく拙い支配を維持していた。彼を支持するために、そして政策に従って、ヤングハズバンド大尉が一〇〇人の銃剣兵とともに送られた。ギルギット守備隊は大隊へと拡充され、マストウイとの間にいくつかの駐屯地が設置された。

こうして帝国軍はチトラルに入った。その立場はたちまち危険に陥った。何百マイルもの悪路と好戦的な部族民によって彼らはギルギットから隔てられていた。ギルギットからの部隊の移動は常に時間がかかり困難である。しかし別のルートもあった。私が説明したルート―ペシヤウルからデイリを北に向かうルート―は、イギリスの領土と鉄道から始まり、より短く容易である。今この連絡線にインド政府は目を向けた。英国軍またはエージエントがチトラルに留まることになった場合、言い換えれば、承認された政策を継続することになった場合、このルートが開通していなければならぬ。そこで本国政府に打診した。キンバリー卿（*インド担当大臣、自由党ローズベリー内閣）の返事は、責任、領土、支出の増加に反対であるということ、そして自分はそのような計画への支持を約束できない、というものであった。同時にニザムの立場の強化を期待して、軍とエージエントの一時的な留置を認可した。「國務大臣からのデイスパッチ、N°.三四、一八九三年九月一日」

ここでウムラ・カーンが物語に登場しなければならぬ。一八九〇年四月二八日付のギルギット機関の報告書はジャンドルのカーンであったこの首長について「チトラルとペシヤウルの間のもも重要人物」としてその影響力がバジャウル全体に行き渡っている、としている。この強力な支配者の元にアミル（*イスラム首長を指すアミールと同じ綴りだが区別するためアミルと表記する）という名前のアマンの息子の一人が父の死後の兄弟虐殺から逃れてきた。ウムラ・カーンは彼を保護し利用することを決意した。一八九四年五月、この若者―約二〇歳―はチトラルに戻り、ウムラ・カーンの手から逃れてきたと偽った。ニザムは弟を親切に受け入れた。その美徳がその経歴を通してずっと彼の邪魔をしていたように見える。一八九五年一月一日、アミルはその歓迎を利用した。兄とチトラル内閣の主要閣僚を殺害したのである。彼は自らをメーダルであると宣言し、承認を求めた。帝国の将校たちは辺境政治に通じていたが、問題がインドで検討されるまではこの悪党とのかかる協定にも関わることを拒否した。

ウムラ・カーンは今や大兵力でチトラル溪谷の頂きへ前進してきた。名目上は親愛なる友人であり、同盟者であるアミルが支配を固めるのを支援するためであったが、実際は自分の領土を拡大することを狙っていたのである。しかしアミルはウムラをよく知っており、自分の王国を勝ち取った以上、それを共有する気はなかった。戦いが起こった。チトラルは打ち負かされた。アミルを利用することができなくなったので、ウムラ・カーンは邪悪な叔父に復帰を勧めた。シャー・アズフル（*アフガニスタンに居た）は受け入れた。契

約が成立した。シャー・アズフルはメータールになったと主張し、ウムラがその主張を支持した。反発の動きに対しては両者が武力で脅迫した。

しかし帝国政府は激怒して立ち上がり、新しい申立人と一切の関係を結ぶことを拒否した。シャー・アズフルにその言い草が無作法であることを告げ、ウムラ・カーンにチトラルから直ちに立ち去るか、その帰結を引き受けるように警告した。答えは戦争であった。乏しい守備隊と散在するイギリス軍部隊が攻撃された。第一四シーク隊の一個中隊はバラバラにされた。ファウラー中尉とエドワーズ中尉が捕虜になった。チトラル派遣軍の残りと同行者が逃げ込んだチトラル砦は綿密に厳重に包囲されていた。彼らを救うことが必須であった。野戦軍第一師団が動員された。四月一日マルダンから一六〇〇〇人近くの部隊が辺境へと入った。現在のチトラル道路の最短ルート—スワットとデイリを通るルート—を前進して救助に向かったのである。遠征隊の指揮はロバート・ロウ卿に託された。ビンドン・ブラッド卿が参謀長であった。

ここまでのところは—主にチトラルで、最終的には国境部族全体において—公認された一貫した方針に従って、イギリスの影響力が着実に増加している。ある動きに別の動きが続いている。すべてが共通の目的を指している。今、私たちは突然、一つの行為に直面することになった。それによって状況をわきまえたインド政府が、彼らが長い間追求してきた進路、それをたどるために彼らが多大な努力をし、国民に多大な犠牲を払わせてきた進路の上に障害物を置いてしまったのである。おそらく良心の呵責から、しかしおそらく騒動を局所的なものに見せ、領土のさらなる獲得を放棄することによって自由党政権（*第三次グラッドストーン内閣）を宥めるためであろう。彼らは対象となる「ウムラ・カーンの側に付いていないスワットのすべての人々とバジャウルの人々」に自らが「ウムラ・カーンの間違った行いのためやむを得ず通過したり部族民の独立に干渉したりすることになったとしても、いかなる領域をも恒久的に占領することはない」という布告を出した。「布告、一八九五年三月一四日」

この宣言が英国での政治目的を意図したものである場合、ある観点からいえば、それは最も見事に成功した。戦争で死亡したり負傷したりしたすべての兵士とほぼ同じくらい、多くのことがそれについて書かれているからである。しかし軍隊の光景に激怒し、政府の宣言に注意を払わない部族民には何の影響も与えなかった。先に簡単に要約した／長く着実に、彼らの勢力を統合する」[インド政府からの手紙、N. 四〇七、一八七九年二月二十八日]というインド政府の公表され、記録されている決定を彼らが読んでいたなら、部族民は政府の真心さえも疑っていたことであろう。しかしそうではなく、そして細かな区別などできなかつたため、彼らにとって軍の移動は侵略としか見えなかつた。

それゆえ部隊の前進を阻むために彼らは集まった。その数は一二、〇〇〇人にのぼり、マラカンド峠―素敵な場所―を占領した。そして四月三日、ロバート・ロウ卿の軍隊の二個先進旅団に完敗して追い払われた。その後の作戦の結果、スワット川とパンジコラ川の通路が成立した。チトラルへの道が開通した。砦の包囲隊は逃亡し、ケリー大佐指揮下の小さな救援部隊がギルギットから押し進んできた。ウムラ・カーンはアフガニスタンに逃亡した、そして将来の政策の問題がインド政府で審議されることになった。

二つの案が浮かび上がった。チトラルに対する「効果的な支配を維持する試みを放棄」する、あるいはそこに十分な守備隊を置く、の二者択一である。その承認されている政策に従い、評議会は満場一致でチトラルでイギリスの影響力を維持することは「第一に重要な問題」であるという結論を出した。本国へのデイスパッチ「インド政府のデイスパッチ、No. 二四〇、一八九五年五月八日」において、彼らはすべての理由を述べ、同時に救援部隊が前進したペシャワルからの道を守備せずにチトラルに駐屯することは不可能であると宣言した。

六月一三日、ローズベリー卿の内閣は賢明ではなかったとしても勇氣を持って断固返答した。「チトラルには軍もヨーロッパのエージェントも存在するべきではなく、チトラルは要塞化するべきではなく、ペシャワルとチトラルの間に道を作るべきではない」これにより一八七六年以来一貫して守られてきた方針は明確かつ最終的に否定されることになった。チトラルは自業自得の苦しみの中に残された。インド政府は覆された。それは古い辺境ラインに戻るための大胆かつ捨て鉢の試みであった。インド政府は「私たちは深く落胆しているが、決定を忠実に受け入れる。」と答え、自分たちの政策の断ち切られた糸を集めて別の織物を織り始めた。

しかし間一髪で自由党政権が崩壊し、ソールズベリー内閣（*保守党）がその決定を覆した。インド問題に関する青書を読むときに、最も向こう見ずな人々でさえ大臣になった途端に着用を強いられる公的責任の同型の仮面の下に、党派の本質の感情が動いているのを見るのは興味深いことである。言い回し、スタイル、対応の口調は同じである。それは常に植民地総督と行政官に対処し、指導する素晴らしい人々である。しかし政治の振り子が揺れるとともにその権勢は後ろへ前へと傾く。そして一八九五年の揺れは非常に大きかったため、前進政策も相応の衝撃を受けたのである。新大臣（*ジョージ・ハミルトン卿）は「歴代の政権が継続的に追求してきたその政策を、その持続が明らかに不可能にならない限り軽々に捨て去るべきではない。」「デイスパッチ、国務大臣、No. 三〇、一八九五年八月一六日」と見ていた。こうしてチトラル駐留は裁可され、その駐留に必要な道路が完成した。

私は細心の注意を払いつつ「背信」という大きな問題に接近しようと思う。主に兵士の行動について書く本の中で、政治家の政治的名誉にかかわる出来事を議論することは差し出がましいかもしれない。軍が行進したとしても、部族民に干渉したり、領土を永久に占領したりする意図はない、という不必要かつ根拠のない宣言をインド政府が出した／ところ。今では部族民に干渉し、ダルガイ、マラカンド、チャクダラに守備隊を設置しており、そのすべては軍が通過した領域にある。しかし取引をするにも（*成句 *It takes two to make a bargain*. 取引をするには二人必要）、背信行為をするにも二人必要である。部族民は宣言を気にも留めなかった。それを理解していなかった。それを信じていなかった。信用がないところに背信はない。国境の人々は前進に抵抗した。その立場は宣言を無効にし、部族民がそれを信用していなかったことを証明した。彼らはだまされたとは思っていない。その道路を「背信」とは見なしていない。彼らがそれをどのように見ているかといえば、その独立への脅威であり、併合の前触れである。それは間違っているのではない。私が見て、描写したように谷を横切って白く走る道／それを通して移動する兵士／すべての方向にその影響力を拡大していく政務担当官／チャクダラの橋と砦／そして、マラカンド峠の拡張していく宿営地を見るなら、その意味を察知するためには教育は必要ない。またいかなる詭弁を弄してもそれを覆い隠すことはできない。